らのけん
#16
華子の一番幸せな日編
著：藍澤たすく
イラスト：かもめ遊羽

らのけんってどんなお話?

三郷学園高校「ライトノベル研究部」——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを目的とした志しの高い部活動……のはず、なんだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまったり系日常部活コメディなのです!

緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。

白井華子

らのけん顧問教師……のはずが、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。覆面ラノベ作家一条れんとしても活躍中!

赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。校正能力もプロ並み。

黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦労は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。

紺野司

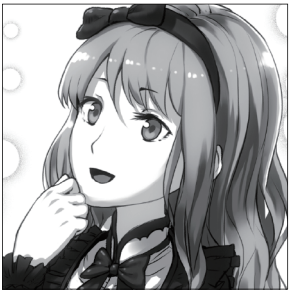
ラノベ作家としての華子、つまり一条れんを担当する編集者。AG文庫編集部に所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。

青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

白井咲耶

華子の弟であり、かつ男の娘。見た目は華子そっくりでまるで双子のよう。
※ただしサイズは全然違う模様。



蔵内豪三郎

本名は蔵内・マリアンヌ・葉子。華子のデビュー作まんみーのイラストを担当するイラストレーター。華子にやや危険な方向の好意を抱いている御様子……?

「やったー！　まんみーの著者校正終わったー！」

ある日曜日の午後。

華子はそう叫ぶと、ＰＣの前からパタリと後ろのベッドに倒れ込んだ。そのまま大の字になって、疲れの色を滲ませながらも満足そうな笑みを浮かべる。

早起きして校正すること連続８時間。やっとまんみー――「まんまミーア・キャット！――今なら無料でキャットがついてきますが何か？――」――３巻の著者校正が終わったのだ。

ちなみに著者校正とは、外部校正と編集部内校正が終わった原稿を、最終的に著者が校正する作業のことを指します。

外部校正と編集部内校正で出た矛盾点や疑問点、誤字脱字衍字などを著者自身が潰して、原稿の完成度を上げていく大切な行程なのです。

「あっ、いっけない！　ちゃんと校正済みのＰＤＦを紺野さんに送らないと！」

華子はがばっと起きあがると、いそいそとメーラーを立ち上げ、校正済みＰＤＦを添付して担当編集の紺野司にメールを送った。

これで今度こそ正しく著者校正作業完了である。

「あっ……」

ＰＣの前で華子が小さく声を洩らした。

『著者校正お疲れさまでした。早速組版データに反映して入稿させていただきます。引き続き

4巻のプロットもお待ちしておりますが、まずはゆっくりとお休みください。　紺野』

そう、司から速攻でメールの返事が戻ってきたのだ。できる編集はメールの返信速度も違うのだ。華子はなんだか自分の苦労が心底報われた気がしてうっとりとした表情になった。

「っていうか、紺野さん、日曜もお仕事なんだ……大変だー……」

先ほどまで死ぬほど著者校正をしていた自分のことも忘れて、華子はしみじみと紺野の苦労を思いやった。

「はっ！　しまった、こんなのんびりしてる場合じゃないわ！」

言うが早いか、華子は素早く身支度を整えて、急いで外出したのだった。

◆

「お待たせしました。こちら特製パフェになります」

「ふわあー……」

目の前にどん、と置かれた大きなパフェを見て華子はうっとりとため息をつく。

ここは地元の駅前にある「喫茶かなりあ」。

華子がよく打ち合わせでも使う老舗の喫茶店である。

そしてここの名物は普通のパフェの3倍の大きさはあろうかという、巨大な「かなりあ特製

パフェ」だった。

華子はその巨大パフェを前に武者震いを抑えることができないでいた。

実は華子はまんみー3巻がアップするまで、己を律する意味で「甘味断ち」をしていたのである。

よって甘い物を口にすること自体も実に1ヶ月ぶり。

しかもそれが「かなりあ特製パフェ」！

らのけん部室に置いてあるお菓子や、帰り際に目にするケーキ屋さん、コンビニスイーツなどなど、あらゆる誘惑を断ち切って原稿を仕上げ、そして著者校正を終えて、いよいよ本日を迎えたという訳だ。

華子は期待に心を躍らせながら、ぎゅっと銀色のスプーンを握りしめる。

そして慎重にクリームを掬って口にふくんだ。

「ふわああ～～～～～……」

1ヶ月ぶりに口中に広がる甘い味覚。鼻を抜ける魅惑的な芳香。そして、とろけるようなクリームの感触。

華子はぎゅっと目をつぶり、天を仰いでその感覚を全身で味わった。

「ふあああ～、これは甘味の桃源郷だわ～甘みの宝石箱だわ～……」

華子は夢見心地で呟いた。

耐えに耐えたあとの、1ヶ月ぶりの特製パフェ。
どんな宮廷料理にも、どんな満願全席にも、どんなフランス料理フルコースにも負けない至高の味わいだった。
もう脳内麻薬が出まくりである。
「ん？」
その後もご機嫌にぱくぱくとパフェをやっつけていた華子だったが、ふと斜向かいのボックス席で文庫本を読んでいる少女の存在に気がついた。
そしてその少女が手にしているのは……。
（まんみー1巻だわ……！）
華子の目がくわっと見開かれた。
3巻が無事アップしたその日に、こうして1巻を熟読してくれている少女を目撃できるなんて！　今日はなんと良い日なのだろう……。
華子はパフェを食べる手を休めることなく、しかししっかりとその少女を観察し始めた。
綺麗な金髪の長い髪。まるで西洋人形のように整った容姿。透き通るように白い肌、というのはこの娘のためにあるような言葉だろう。左の目許にある泣きぼくろが、その美しさにアクセントを添えていて印象的だった。
アールグレイの紅茶を口に運ぶ様もとても優雅で気品を感じさせる。どこぞ名のある名家の

お嬢さまなのだろうか。
（こんな綺麗な娘にまんみーを読んでもらえるなんて幸せだわー……）
華子はお口の中のとろけるような甘さの幸せと、まんみー作者としての読者に喜んでもらえる幸せを、ダブルで噛みしめる。今日は人生最良の日といっても華厳の滝ではなかった。いや、過言ではなかった。
しかし。
「あっ……」
華子は思わずスプーンを取り落とした。
なぜなら……。
「ぐすっ……」
まんみーを読んでいる少女の目から大粒の涙がひとつ、ぽろりと零れ落ちたからだ。
瞬間、華子はパニックに陥った。
（えー、なに、なに⁉　1巻ってそんな泣くようなところあったかしら⁉　確かに師匠との別れのシーンはそれなりに悲しかったかもしれないけど、でもでも、必ず強くなって再会するんだって前向きのシーンだったからそんな泣くほどのことじゃ……。はっ！　もしかしてこの娘、メガネっ娘属性なのかしら⁉　だとするとメガネっ娘のアニマルグリーンが追いつめられていくシーンは確かにちょっと辛いかも……でもでも、最終的には勝つんだし、そこは勝利を引き

立てるための溜めのシーンだから頑張って読んでもらわないと……！）

華子の頭の中を様々な思いがぐるぐると交錯する。

もはやパフェどころではなかった。

気になる。

あの娘がどのシーンで泣いているのかが、超気になる。

「あの、ここ、よろしいでしょうか？」

「？」

居ても立ってもいられず、華子はその娘の席の真向かいに座った。

「あ、あの、あたしもそのまんみー……『まんまミーア・キャット！』……好きなもんで、ちょっと気になっちゃって、その……急にごめんなさい」

「あ、ああ、そうですカ。コレ、おもしろいデスよね」

（外人さんだー!?）

少し不思議なアクセントの日本語で応える少女を前に、華子は戦慄した。

「あ、ああの、マイ、フェーバリット、ラノベ、イズ、まんみー、えっと、あの、その……プリーズ、テルミー、ええっと『泣いてる』って英語でなんて言うんだっけ……」

「ダイジョブです、あたし日本語チョト喋れます、ワカリます。日本語でダイジョブです」

「あ、そうなんですか、良かったー……」

あからさまに安堵する華子に少女は微笑を返した。

「はじめマシテ、私、ブラッディマリー・ビンセント・ゴールデンバーグいいます」

「あ、はじめまして、わたくし白井華子と申します。……あの、失礼ですけど、ビンセントさんはどうして泣いてたんですか？」

「マリーでいいデスよ、ハナコさん。……あの、実は私、ウレシかったんです」

「嬉しい？」

「ハイ。こうして日本に来ることがデキテ、こうしてゆっくりラノベやマンガを読むことがでデキテ……こんな幸せなコト、母国では考えられないコトですカラ」

マリーの意外な応えに華子は目を丸くした。

「ラノベが読めない国なんてあるんですか？」

「ハイ。私の家のジジョウもあるんですけど、こういうのはイッサイ禁止で……だからラノベやマンガは親に隠れてコッソリ読んでマシタ。ダカラ、日本語読むはバッチリです。聞くのと喋るのは、マダちょと苦手デス」

そう言ってマリーはまたにっこりと微笑んだ。

（そっかー、あたし、当たり前のようにラノベ読んでたけど、それができない国もあるのねー……）

マリーの涙の原因がまんみーではないと判って、華子はちょっとほっとしたような、でも

がっかりしたような、複雑な気持ちになった。
「デモこのラノベ、本当におもしろいデス。親友のジュリーが薦めるワケがわかりました。アニマルガールたちがso cuteですネ」
「えへへへへ、ありがとうございます～……じゃなかった、あたしも読んでてそう思いました！」
うっかり素で返事をしてしまった華子はあわててその場を取り繕う。
しかし内心は。
（うふふふふ、まんみーが外人さんにもウケるなんて……これは紺野さんに海外翻訳版をばんばん出してもらわないとー！　うふふふふ……！）
すっかり有頂天になっていたのだった。
「あ、あのこれよろしければ差し上げます！」
「？」
華子はポーチからブレスレットを取り出すと、マリーにそっと差し出した。
「Oh！　これはアニマルガールたちが戦闘装束に変身するトキのモーフィング・ブレスレットではないデスカ⁉」
「はい。あたしもまんみー好きで、これ、ついつい作っちゃったんですよ～」
「Oh！　ではこれはハナコさんのハンドメイドなのですか？　そんな貴重な物をいただいていいんでしょうカ？」

「勿論です！　また作ればいいだけの話ですし、こうしてファンの人に持ってもらったほうがその子も幸せです！」
華子はそう言ってにっこりと満面の笑みを浮かべた。
「そうだ！　これ、もうひとつありますんで、せっかくですから一緒にアニマルガールの変身シーンをやりませんか？　マリーさん？」
「Oh‼　それは名案ですネ、ハナコさん！」
言うが早いかマリーはすっと立ち上がった。
華子も素早くその横に立つ。
「この世に悪がある限り！」
「アニマルガールはミノガサナイ！」
「モーフィング・アクト、スタート‼」
ノリノリで挿絵通りの変身ポーズを決めるマリーと華子。
周りの客はそれを呆然として眺めている。
「……うふ、うふふふふ」
「……あはっ、あはははは！」
やがてマリーと華子はどちらからともなく、笑い出した。

それは腹の底から湧きあがってくるような爽快な笑いだった。
「ハナコさん……」
またマリーの瞳から大粒の涙がぽろりと零れ落ちた。
「ど、どうしたんですか、マリーさん⁉」
華子が慌ててマリーにハンカチを差し出すと、マリーはそれを受け取って軽く目許をぬぐった。
「すみません、ハナコさん……あたし、また嬉しくって泣いてシマイマシタ。……こんな風に好きなラノベの話をできて、しかも一緒に変身ポーズまでできるナンテ……今日は人生最良の日デス……」
「……！」
マリーの暖かい言葉は華子の胸に迫るものがあった。
この子、本当にラノベが好きなんだ。
なんとか母国でも自由にラノベが読めるようにならないかしら……。
華子は切実にそう願った。
「スミマセン、華子さん。そろそろあたし行かないとイケマセン。これは洗って返しますから……」
「あ、いえ、いいですよぅ、そんな気にしなくても！　それも差し上げますから！」

「いいんデスカ……？　でも今日は本当に楽しかったデス。ありがとうゴザイマス」
そう言うとマリーは何度も何度もお辞儀をしながら、お店をそっと後にしていった。
華子はその姿に、いつまでもいつまでも手を振っていたのだった。
「はー……いい子だったなあー、マリーちゃん……また会いたいなあ……あっ！　住所とかメアドとか訊いとけば良かったー！」
華子はまた特製パフェの前に戻ると、残念そうにそう呟いたのだった。

◆

「華ちゃん、なんかいいことあったの？」
「えへへへ～、やっぱり判りますか～」
翌日の放課後、らのけん部室。
萌に問いかけられた華子は満面の笑みを浮かべた。
「なんと！　昨日、無事まんみー3巻の著者校正が終わったのでーす！」
「おー！　やったじゃん、華ちゃん！」
「おめでとー！」
後ろの席に座っていた一斗と美玖も祝福の声をあげる。

「でもほんとすごいよね～華ちゃん。この前デビューしたと思ったらもう3巻も出るんだもん」
「えへへへ、おかげさまで今のところまだまだ調子がいいので、シリーズ続けてもいいって紺野さんにも言われてるんですよぅ～」
華子は紅潮した頬を両手で包むともじもじと身をよじった。
よほどご満悦のご様子だ
「それにですね～、昨日『かなりあ』で素敵な出会いがありまして～……」
萌たちにマリーのことも話そうとした華子だったが、その瞬間なぜか部室のテレビにすーっと目が引き寄せられた。
（あら……？）
華子は軽くデジャヴ感を覚えた。
画面に登場した少女になんとなく見覚えがあったからだ。
テレビに映っているのは訪日しているヨーロッパの小国のお姫様らしい。
綺麗な銀髪のボブカットの上に、細工の凝ったティアラがちょこんと乗っている。
豪奢なドレスはいかにもお姫様という雰囲気だ。
そしてまるで西洋人形のように整った容姿。
左の目許にある泣きぼくろが、なぜかとても印象的だった。

「どうしたの？　華ちゃん？」
テレビを覗き込む華子を見て、萌が小首を傾げる。
「えっと、この娘、どっかで見たことあるようなー……」
華子はあごに人差し指を当てて、ますます真剣に画面に見入った。
テレビから音声が流れ出す。
『それでは早速会見をはじめさせていただきたいと思います。時間もありませんので、ご質問は各社ひとつずつとさせていただきます』
『はい！　今回初めて日本を御訪問された御印象は？』
どうやらお姫様が帰国するにあたり、記者会見を開いているらしい。
『はい。以前から思ってオリマシタガ、やはり日本は想像以上にスバラシイ国だと思いマシタ』
「あっ!?」
にこやかに質問に答える彼女を見て、華子は思わず声をあげた。
その右手に見覚えのあるモーフィング・ブレスレットがはめられていたからだ。
「マリーちゃん……お姫様だったんだ……」
華子は思わず口に手を当ててそう呟いた。
「え？　なに、どうしたの、華ちゃん？」

「あ！　……ううん。なんでもない、なんでもないんですぅ～」
言いながらも華子は幸せそうな笑顔を浮かべる。
萌はそんな華子を不思議そうに見つめるのだった。

つづく

●「らのけん！」シリーズ掲載号一覧

★２０１４年
ＧＡ文庫マガジン７月24日配信号：らのけん！
ＧＡ文庫マガジン９月合併配信号：らのけん！　２　夢の最終選考編
ＧＡ文庫マガジン10月27日配信号：らのけん！　３　はじめてのおつか……うちあわせ編
ＧＡ文庫マガジン11月27日配信号：らのけん！　４　思い切って告白しちゃうぞ編
ＧＡ文庫マガジン12月25日配信号：らのけん！　５　ペット攻めたり編

★２０１５年
ＧＡ文庫マガジン１月22日配信号：らのけん！　６　はじめての発売日編
ＧＡ文庫マガジン２月26日配信号：らのけん！　７　かんこれ、始めました編
ＧＡ文庫マガジン３月26日配信号：らのけん！　８　MISAO STRIKE BACK!!編
ＧＡ文庫マガジン４月24日配信号：らのけん！　９　はじめてのごあいさつ編
ＧＡ文庫マガジン５月28日配信号：らのけん！　10　その薔薇の名は……編
ＧＡ文庫マガジン６月25日配信号：らのけん！　11　咲耶、襲来！　編
ＧＡ文庫マガジン７月23日配信号：らのけん！　12　ライトノベルが出来るまで編

ＧＡ文庫マガジン８月21日配信号：らのけん！　13　もっとも冴えた３つのお題編
ＧＡ文庫マガジン９月18日配信号：らのけん！　14　華子、風邪をひく編
ＧＡ文庫マガジン10月22日配信号：らのけん！　15　はじめての対談編